

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：36101

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K17588

研究課題名（和文）特別支援学校の医療的ケア従事者の協働を評価するシステムづくり

研究課題名（英文）Creating the system to evaluate the collaboration of medical care workers in special needs schools.

研究代表者

金山 三恵子（KANAYAMA, MIEKO）

四国大学・看護学部・教授

研究者番号：60757912

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：協働の成否に与える要因のデータ解析を行い2つの成果が得られた。看護師配置人数が1人の時に比べ看護師配置人数が2人以上になると看護師の協働達成感得点は低くなるが、教員や養護教諭の協働達成感得点は高くなることが分かった。次に、援助者間で、子どもの心身の状態に関する感じ方やアセスメントは一致する場合もあれば、少し違う場合もある。この違いが生じると、ケアの方法やタイミングなどの考え方に差異が生じてしまう。この援助者間の考え方に差が生じた場合に、医療的ケア従事者間での日常的なコミュニケーションに気まずさや不満が生じ、それが協働を阻害する大きな要因になることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

特別支援学校における医療的ケア従事者間の協働を促進するには、看護師の雇用形態の見直しや配置人数の見直しが必要であることという結果が得られた。医療的ケアの多職種協働の成否に、学校看護師の配置人数や学校看護師の雇用形態が影響することを明らかにできたことは、医療的ケアシステムづくりに貢献する成果であると考えられる。また、研究者が開発した協働達成感尺度や本研究の成果を元に特別支援学校以外の場所での医療的ケア児の多職種の協働についての研究に取り組む研究者が続いており、医療的ケア児の支援における多職種協働に関する研究の発展に寄与する成果であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Two results were obtained by analyzing data on factors affecting the success or failure of collaboration. The Nurse-Teacher Collaboration Scale scores were lower when the number of nurses assigned was two or more than when the number of nurses assigned was one, but the Nurse-Teacher Collaboration Scale scores of teachers and school nurses were higher. Scale scores were higher for teachers and school nurses. Second, the feelings and assessments of the child's physical and mental status may be consistent or slightly different among the caregivers. These differences can lead to differences in the way of thinking about methods and timing of care. This difference in thinking among caregivers causes awkwardness and dissatisfaction in daily communication among medical caregivers, which is found to be a major factor that hinders collaboration.

研究分野：地域看護学

キーワード：バーンアウト 多職種協働 医療的ケア児

1 . 研究開始当初の背景

特別支援学校に通学することもたちが重症化し、喀痰吸引や経管栄養など、高度な医療技術を伴う医療的ケアを、教職員が学校で行うことが求められている。しかし、教職員にとって、医療的ケアの実施は心理的な負担が大きいこと、教職員と看護師の連携が難しいこと、また孤立感から看護師が離職してしまうなど、協働がうまくいかないことが、教職員や看護師のバーンアウトの大きな要因となることが懸念されている。また、子どもたちが安心して医療的ケアを受けるためには、看護師と教職員のよりよい協働関係のもとにケアが提供されることが望ましいと述べる研究者は多いが、協働の成否について科学的な根拠を提供する研究は数少ない。

そこで、協働の成否を定量的に評価する評価システムをつくり、協働の成否を全国統一した基準で定量的に評価することが可能となれば、協働の成否を医療的ケアに従事する個人の資質や能力に委ねることなく評価できる。協働がうまくいかない要因の特定が可能となるため、介入計画が立てやすい。全国の特別支援学校を基準にして、自分の所属する医療的ケアチームの協働はうまくいっているのか/いないのかを客観的に評価することが可能となる。協働を促進することで、子どもたちへの医療的ケアの質の維持、向上(少なくともケアの質の低下は回避できる)に加え、医療的ケア従事者のバーンアウトの予防が可能になると考えられる。

2 . 研究の目的

本研究は、医療的ケアを受けながら特別支援学校に通う子どもを支援する教職員・看護師・養護教諭の協働の成否を定量的に評価する評価システムをつくることを目的として、本研究期間内に協働達成感尺度を用いて算出した得点を高い/低いと解釈する指標を作成することである。また、医療的ケアを学校組織全体の取り組みとして捉え、協働がうまくいっているのか、うまくいっていないのか、うまくいっていないのはどのような要因によるものなのか等について明らかにし、協働を促進するための方策を見出す。そして、協働の成否と医療的ケア従事者のバーンアウトとの関係を検証し、医療的ケア従事者のバーンアウトを予防する組織・システムづくりについて検討することである。

3 . 研究の方法

医療的ケア従事者の協働達成感尺度(金山, 岩井, 2014)を用いた質問紙調査で既に取得しているデータを分析する。また、特別支援学校の医療的ケア従事者にインタビュー調査を行い、協働の成否に影響を与える要因について質的に検討する。

<分析方法>

(1) 「協働尺度」の分析

性別、経験年数、職種、勤務形態、雇用形態などの項目がバーンアウトに与える影響を重回帰分析等により検証する。

(2) 協働の成否がバーンアウトに与える影響についての分析

協働達成感の高い/低い、バーンアウト得点の高い/低いにどの様に影響しているかについて検証する。

(3) インタビュー調査

協働の成否に与える要因の分析結果についてインタビュー調査を行い、その要因について質的に検証する。

4 . 研究成果

協働の成否を学校組織全体の取り組みとして捉え、協働がうまくいっているのか、うまくいっていないのか、うまくいっていないのはどのような要因によるものなのか等について科学的根拠に基づいて評価を行い、さらに、そのデータについて、経験値と一致しているかについて質的な検証を行い、協働の成否に与える要因についての分析を進めることにより、下記の成果が得られた。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行により、現地調査が困難であったため当初予定したインタビュー調査によるデータ収集が計画通りに実行できなかった。そのため評価指標を SNS や HP で公開するまでには至らなかった。

【結果】

(1) 協働尺度の分析

性別、経験年数、職種、勤務形態、雇用形態などの項目がバーンアウトに与える影響を重回帰分析等により検証を行った。特に、協働の成否が、医療的ケア従事者の性別、経験年数、職種、勤務形態、雇用形態などによって違いがみられるか/みられないかについて、重回帰分析を行った。その結果、職種の違いや雇用形態の違いが協働達成感に大きく影響する要因であることが分かった。さらに分析を行った結果、看護師配置人数が1人の時に比べ看護師配置人数が2人以上になると看護師の協働達成感得点は低くなるが、教員や養護教諭の協働

達成感得点は高くなるということが分かった。また、看護師配置人数が2人の時の方が3人以上の時と比べて看護師同士の協働達成感は低くなることが分かった。このことから看護師配置人数が2人の時に看護師同士で協働することが難しくなるが、その一方で、看護師配置人数が複数人以上の方が看護師と看護師以外の職種間の協働は促進されるという知見が得られた。また、看護師の雇用形態によって協働達成感の高い/低い異なることも分かった。特別支援学校で医療的ケアに従事する看護師はパートタイム労働者が多いことから、教職員や養護教諭とは異なる協働の困難さを有していることが分かった。看護師は専門的な知識を必要とするコミュニケーションでは協働達成感が高いが、日常的なコミュニケーションでは教職員や養護教諭よりも協働達成感が低いことが分かった。その背景として、看護師は医療的な知識や技術などの医療的ケアの医療面で重要な役割を担い、その専門性を尊重される一方で、パートタイム労働者であるため、日常的な人間関係の形成という面で、他の職種に対して気兼ねや遠慮などがあり、気楽に日常のコミュニケーションをとることが困難であることが分かった。勤続年数が高い看護師は、勤続年数が短い看護師よりも日常のコミュニケーション得点が高いことから、パートタイムという雇用形態が看護師と他の職種とコミュニケーションに影響を与えていると考えられる。協働を促進する上で、医療的ケアに従事する看護の雇用形態を改善し、教職員や養護教諭と同等の立場で医療的ケアに従事できる体制づくりが必要であることを示す結果であると考えられる。また、日常の対人関係において、教職員や養護教諭と看護師が気軽に声をかけ、話やすい雰囲気をつくるようにするなど、パートタイム労働者が気兼ねや遠慮をすることなく働ける組織づくりが必要であると考えられる。

(2)協働を阻害しバーンアウトを促進する要因について

重回帰分析によりバーンアウトの最適モデルを検討した結果、バーンアウトの最適モデルに残った変数は、勤務形態、経験年数、日常的コミュニケーションへの充足感、専門性の認知・尊重に対する充足感であった。これらの中で最も偏寄与率が高い変数は日常的コミュニケーションの充足感であった。コミュニケーションといっても、日常会話からビジネス会話まで幅が広く、具体的に、どういったコミュニケーションがバーンアウトに影響するのかについて、インタビュー調査により質的データを収集した。その結果、バーンアウトに最も影響しているのは、障がいや有する子どもの心や体の状態の捉え方や感じ方、アセスメントに関するコミュニケーションである可能性を示唆するデータが得られた。医療的ケアを受ける子どもは自らの健康状態や気持ちなどを他者に伝えることが困難である。そのため、援助者の言葉が子どもたちの心と身体の状態を代弁することになる。援助者間で、子どもの心身の状態に関する感じ方やアセスメントは一致する場合もあれば、少し違う場合もある。援助者間で、子どもたちの心身の状態に関する捉え方や感じ方、アセスメントの違いが生じた場合に、ケアの方法やタイミングなどの考え方に差異が生じてしまう。この援助者間の考え方に差が生じた場合に医療的ケア従事者間の日常的なコミュニケーションに気まずさや不満が生じ、それが協働を阻害する大きな要因になることが分かった。

(3)協働の成否における組織・システムづくりの重要性

バーンアウトに直接的に影響する要因は、日常的なコミュニケーションへの充足感、専門性の認知・尊重に対する充足感であるが、日常的なコミュニケーションへの充足感、専門性の認知・尊重に対する充足感は組織・システムの要因の充足感が高くなると、これらも高くなることが分かった。インタビュー調査でも、毎日の連絡や報告の時間の確保、行事変更や子どもの体調の変化等についての情報共有の方法などの体制づくりが学校全体の取り組みとして行われている学校と個人の資質や能力に委ねられている場合とでは、従事者の心理的負担感が違うというデータが得られた。医療的ケアを学校組織全体の取り組みとして捉える上で、協働達成感尺度の組織・システムの要因のみを独立して評価することが望まれるというデータも得られた。組織・システムの要因を促進することが協働を促進するには重要であり、個人の協働の成否を測定することと併せて、学校全体の組織・システムについて定量的に評価する指標づくりが必要であることを示す結果であると考えられる。

【今後の展望】

(1)組織を対象とした協働の成否を定量的に評価する指標づくりの必要性

本研究期間で、特別支援学校に通う子どもを支援する教職員・看護師・養護教諭の協働の成否を定量的に評価する評価指標として、日常的なコミュニケーションへの充足感、専門性の認知・尊重に対する充足感、組織・システムの要因の充足感という協働達成感尺度の3つの下位尺度を用いて検証を行った。これらは従事者一人ひとりが個人で評価する指標である。今後は、学校全体で評価する指標づくりを行い、例えば、学校長又は教頭、学校保健委員会の委員長、養護教諭などが評価指標を用いて医療的ケアにおける協働が促進する組織づくりができていないか/できていないかを定量的に評価できるように、組織・システムに特化した評価指標づくりに発展させたい。

(2)医療的ケア児のアセスメントに関する研究の必要性

援助者間で、子どもの心身の状態に関する感じ方やアセスメントは一致する場合もあれば、少し違う場合がある。重症心身障害児のアセスメントにケア従事者間で差異が生じることに關しての研究は既になされている。しかし、同職種間、例えば、看護師同士や教員同士で差異が生じる場合、職種は違うが同じ医療職同士で差異が生じる場合、教育職と医療職の様に分野の違う職種で差異が生じる場合では、差異の生じ方や考えかたが異なると考えられる。教育職である教員と医療職である看護師、看護師免許を持たない養護教諭、看護師免許を有する養護教諭で医療的ケア児のアセスメントに、どのような差異が生じるのか、差異を生じる場合（生じる人）と一致する場合（一致する人）にどのような違いがあるのかについての研究は十分になされていない。そこで、子どもの心身の状態に関する感じ方やアセスメントの差異が生じる要因を明らかにし、医療的ケア児のアセスメントの信頼性と正確性を確保する方法を検討したいと考えている。

【研究期間内に得られた社会的意義】

協働を促進するには看護師の雇用形態の見直しや配置人数の見直しが必要であることが明らかになった。この成果は、医療的ケアに従事する看護師確保の方策を検討するためのデータになったと考えられる。また、医療的ケアの多職種協働の成否に、学校看護師の配置人数や学校看護師の雇用形態が影響することを明らかにできたことは、医療的ケアシステムづくりに貢献する成果となったと考えられる。また、研究者が開発した協働達成感尺度や本研究の成果を元に特別支援学校以外の場所での医療的ケア児の多職種の協働についての研究に取り組む研究者が続いており、医療的ケア児の支援における多職種協働の研究が発展していることも本研究の波及効果であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 金山三恵子
2. 発表標題 特別支援学校の医療的ケア従事者の協働の成否がバーンアウトに与える影響について
3. 学会等名 日本地域看護学会第23回学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金山三恵子
2. 発表標題 特別支援学校の医療的ケア従事者の協働の成否がバーンアウトに与える影響について
3. 学会等名 日本看護科学会第40回学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kanayama, M. and Yuma, Y.
2. 発表標題 Longitudinal burnout- collaboration patterns in Japanese medical care workers at special needs schools : a latent class growth analysis .
3. 学会等名 The Society for the Study of Social Problems 69th Annual Meeting . , New York , America , 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 武藤久枝, 小川英彦, 一木薫, 大河内修, 荻原はるみ, 勝浦眞仁, 金山三恵子, 岸本美紀, 熊谷享子, 幸田政次, 白取真実, 千田隆弘, 高沢佳司, 橋本悦子, 布施由起	4. 発行年 2018年
2. 出版社 建帛社	5. 総ページ数 189
3. 書名 コンパス 障害児の保育・教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------